主体の解釈学
コレージュ・ド・フランス講義　1981―1982 年度

担当：食パンぱんこ

- 自己の実践が命令、規則となり、そして哲学や哲学者、哲学的制度とたいへん特権的な関係を持った行いのあり方になった、その経緯について
    - 自己の実践の規則そのものを広め、その考え方や方法を流通させ、そしてそのさまざまなモデルを提供したのは、他ならぬ哲学者

- 自己の実践が普及するにつれて、職業哲学者の在り方が次第に曖昧になっていった
  →哲学者が不信の対象になったことも
    - 哲学者が与する相手の選択
    - 職業哲学者の存在そのものが惹起するいくつかの政治的な問題
        - EX）アウグストゥスの時代
          →哲学が自己の技法を自称し人々に自分自身のことを配慮するよう差し招くとき、それは有益なのだろうか？

- 哲学者の職業的活動をめぐる一連の興味深い議論がある

【プリニウス・エウフラテス】p.177, l.11~
- プリニウスの手紙の中のエウフラテス（ストア派の重要な哲学者）について
    - （1）プリニウスは若くして軍事上の公職に就いていた時に彼（エウフラテス）の知己を得た
        - プリニウスは若くはあったが、子どもでも学齢期の児童でもなかった

    - （2）プリニウスはエウフラテスのもとに親しく出入りする
        - プ「私は彼（エウフラテス）をとことん親しく、家で会い、見て吟味することができた」
        - プリニウスはエウフラテスの家に継続的に訪れており、その結果人しえのいくつかの瞬間、生存のいくつかの局面をともにすることになった

    - （3）プリニウスとエウスラテスの間には強い感情的な関係があった
        - プ「私は彼（エウフラテス）に愛されるように努めた」
        - さらに友愛を求めたい相手に自分を愛させるための大変な作業、労力といったものがある（セネカ『恩恵について』の内容とも合致）
        - そして友愛を求めようとする相手の友愛の輪の中での互いの相対的な位置によって定まるいくつかの規則を適用しつつ行われる
          ＝一人の人を中心とした友愛の社会的構造
        - この場合の労力というのは、おそらく授業への打ち込み方で、ローマ的な友愛に比較的近いかたちの、双方から相手に与えられたいくつかの助力
          ≠「恋愛的友愛」、ソクラテスと村弟子たちの間にあったかもしれないような愛、エロスといったもの、エピクロス的な友愛の中にあったかもしれないようなエロスといったものとは全く無関係だった

- エウフラテスは絶えず弟子たちに、正義を行うこと、都市の事柄を管理すること、要するに自分の職業なり地方名士やローマ当局の代表としての役割なりを行うということが哲学を実践することだと言っていた

  ＜彼の教えの特徴＞p.179, l.16~
  - 一方に非常にはっきりした、非常に強調された賛美
    - プリニウスはエウフラテスの人柄を大変に褒め称え、あらゆる美質を持つ、非常に強い感情的な絆を結ぶことができるような例外的人物に仕立て上げる
    - 彼（エウフラテス）を、この人物を出発点として、人は哲学に対して、考えうる最良の関係を取り結ぶことができる
  - 伝統的に職業哲学者を徴付けていた特徴を体系的に排除することでなされている
    - 演説家と哲学者の区別を消し去る
  - 自分のところにやってくる人を叱りつけたり手荒く扱ったりはせず、みんな気前よく鷹揚に迎え入れる
    - 攻撃的ではなく、いわば人の生存様式のいわば平衡を失わせてかき乱し、そして彼を押したり引っ張ったりすることで、強いて別の生存様式を取らせる
  - 正義を行い都市の事柄を管理することが哲学することだということによって、哲学生活が、それの持っていた独特なものの中でひっそりと送られるというあり方、あるいは哲学が政治的生活に対して一定の距離を取るといったあり方、そうした哲学のあり方がカッコに入れられることになった

- エウフラテスはまさに、哲学的実践と政治生活の分割をしない人だった
- エウフラテスへの賛辞は、そのあらゆる要素において、そのあらゆる描出とともに解釈すべき
  - これは哲学を一つのあり方に、振る舞いの様式に、一つの価値観の全体の中に、またさまざまな技術の全体の中にいわば送還することで、その価値の引き上げを図ろうとするもの
  - これらは伝統的な哲学ではなく、ローマ的な鷹揚さや修辞学の実践、政治的責任といったものがその中に現れてくるような、一つの文化的総体に属するもの

    ⭐結局プリニウスは、哲学することしかしない哲学者の伝統的な姿に対して、これを脱職業化することによってはじめてエウフラテスを讃えた
    ＝エウフラテスを、社会化された知恵をもつ一種の大貴族として提示した

[このテクストが示すもの]p.181, l.10~
- 1 世紀から 2 世紀にかけての、最も特徴的な点の一つであった
- つまり、哲学の名において自己の実践の教導権を要求していた制度や集団、個人の外において、この自己の実践が一つの社会的実践になったということ
  - それは、厳密に言えば専門の人でなかったような人たちのあいだで発展し始めた
  - 哲学的な制度の外、哲学という職業の外で、自己の実践を実践し、普及させ、発展させようとする大きな動きがあった
    ＝自己の実践を個々人の間の関係の一様式にしようという、大きな動き

- これは自己の実践を、他者による個人の統制の一種の原理にすることによって、つまり個人が他者を支点や媒介として自分自身との間に一つの関係を形成し、発展させ、確立する際の一種の原理にすることによって目指されていた

- この他者は必ずしも職業哲学者である必要ないが、もちろん哲学を通過し、哲学的な諸概念を持っていることが必要不可欠
  ＝師の姿、師の役割こそがここで問題になっている

ソフィスト・ソクラテス・プラトンの時代	エウフラテスの時代
かつて師はその特異性において捉えられ、そのソフィスト的な能力や腕前、あるいはソクラテスの場合には召命、プラトンの場合は彼がすでに知恵に到達してしまっているという事実に支えられてきた	自己の実践は社会的実践と結び合うようになっている。自己の自己への関係の構成が、非常にはっきりとした仕方で自己の＜他者＞への関係に接続した

以前の師のあり方の消滅

【セネカ】p.182, l.7~

- セネカの一連の対話の相手が全てこの事例ということになる
  ＜セネカ＞
  ・職業哲学者
  ・哲学者として、ネロの家庭教師（忠告者）になる

- エウフラテスらがそうであったような意味での哲学教師とは比べられない
  - 政治的活動、行政的活動をたくさん行った
  - 彼が関わった人、彼が忠告を与えた人、彼が良心の師、良心の指導者という役割を務めた人＝彼が家族関係など他の関係も持っていた人々

- セネカは誰かを指導し、忠告を与えるために介入するが、その都度彼がしているのは結局、社交的な関係、身分や地位の関係、政治的な関係を転調するということに過ぎなかった
- そうした関係があって、その上に彼は良心の指導という活動を接続し、接木していた

[このテクストが示すこと]

- セネカやプルタルコスが他者を導くべく介入するのは職業的哲学者としてではない
- 彼らはこれこれの人との間に取り結ぶ社会的な関係（友情、顧客関係、庇護など）が、その次元として―同時に義務、責務として―魂の助力と、それから他者に然るべく前進することを可能にする一連の介入、忠告の基礎となる可能性を含意している限りにおいて介入する

【フロントとマルクス・アウレリウス『自省録』】p.184, l.6~

- フロントはマルクス・アウレリウスの先生
- フロントは雄弁術教師だった

- マルクス・アウレリウスによる、フロントについての言及
  「フロントのおかげで、私は権力の行使がいかに偽善をもたらすか、また我々のところの貴族が、どれだけ「愛することができない」かを悟ることができた」

  →この２つの要素は、フロントにおける偽善や追従の対極にある率直なあり方を示している
  - パレーシアの考え方（後で言及される）
  - 愛情
    - [マルクス・アウレリウスからフロントへの長い手紙の引用]
    - 実際には、この関係の支えになっているのは友愛であり、愛情、情愛が主要な役割を演じている
    - フロントにとって問題になっているのは絶えず愛であり、彼らの相互愛である
    - この関係が性的な性質のものであったかあるいはそうでなかったか、という問題を立てるのは的外れ

- こうした哲学的、技術的関係ならぬ師との愛情の関係という背景のもとで、どのように手紙ができているのかを見てみる
  - これが目覚めから就寝に至る、単に１日の細々とした出来事を物語るものであることがわかる
  - これは結局、１日の物語を通して語られた、自己の物語

  - 自分の物語に含まれるべき以下の三つのカテゴリー

    （１） 健康や養成法の詳細
    →自分の医術的養生を説明している

    （２） 自分の家族や宗教に関わる義務
    →農民の生活についての言及
    →カトー『農業論』：ローマの農業所有者が、最大の繁栄、最良の倫理的形成、そして都市の最大の利益のためにはどう行動すべきかを示す家政学の本
    →ブドウを狩ることで運動する、読み書きするなど
    →田園研修の社会的、倫理的、政治的なモデルが今や、訓練という資格で再び取り上げられている
    ＝他の人と一緒に行う一種の退却だが、その目的は自己自身であり、自己をより良く形成し、自己に対し行う作業を進めて自己へと到達するということ
    ＝家族関係、家政的生活の側面

    （３） 愛に関わる要素
    →「真実の愛とは何か」ではない
    →二人の男性の愛の強さ、価値、形式が二人の女性の愛と比較されている

- 自己の実践が実際に行われる３領域
  →身体、身近な人々と家、愛
  →養生法、家政学、恋愛術

- これらはつながり合っている
  - 養生に配慮するからこそ、人は農業生活を実践し、収穫に出かける（＝家政へと移行する）
  - 家族関係の中、家政を定義する関係の中で、人は愛の問題に出会う
  - 養生法→家政学→恋愛術

- これら三つの要素はすでにアルキビアデスの一節で出会っている
  - 「もし配慮しなければならないものが魂であるとしたら、この自己への配慮は身体への配慮ではないし、財産への配慮でも、恋愛的な配慮、少なくとも恋人たちの考えるような配慮でもない。」
  - つまりプラトンのテクストのアルキビアデスの発言では、３つの要素とは完全に区別されていた

- 反対に、今やこれらの３つの要素が自己への配慮に再統合された
  ＝これは反射面としての再統合
  ＝いわば自我が自己を試練にかけ、自己を訓練し、そしてその生存の規則であり目的であるような自己の実践を展開する機会として再統合された
  ＝養生法、家政学、恋愛術は自己の実践の応用領域として現れてくる

【手紙のさらなる分析】p.190, l.7~
- マルクス・アウレリウスの手紙
  - 眠る前に彼は「務めを広げてみ」る
  - これはセネカが描き出していたような良心の吟味
- セネカ
  - 自分の生活と過去の時期の巻き物を、目の前にときおり広げてみる必要性

- 過ぎ去った１日を顧みるということ、かつそれが眠る時に行われること
- そしてそれを「私のたいへんお優しい先生」に説明をすること

- ここに、指導がどのようにして一つの経験に、全く自然な経験になりつつあるのか、そうなっていたのかについての興味深い事例
  - 親しい友人に対して、たいへん強い愛情的関係を取り結んでいる友人に対して、人は良心の吟味を行う
  - 友人を良心の指導者とし、哲学者としての資格があるかどうかとは無関係に、ただ友人であるからという理由でその人を指導者にすることは、ごく普通に行われていた
  - そして人は自ら、自分自身に対して（過ごした１日、行った仕事、たしなんだ気晴らしについて）こうした態度を取る
    ＝誰かに日々を説明し提示すし解き明かすことができるものとする
    →誰に対してか？：裁判官・捜査官・師

【まとめ、パレーシア】p.191, l.20~

- 自己の実践が、少なくとも個人間では一種の社会的関係となった
- これは何かたいへん新しいもの、たいへん重要なものが展開されている

- これは言語や言説一般の、というよりむしろ＜他者＞との言語的な関係の新しい倫理
- パレーシア
    - 一般に「率直さ」と訳される
    - これは良心の実践において、他者と共有されるべきゲームの規則であり、言語的行動原理のこと

- 次回：パレーシアの説明をして、次に良心の指導における他者への言語的な関係がどのように、どのような形で技術化していったかをみることにする